

Title	クライストの『ミヒャエル・コールハース』についての一考察
Sub Title	Eine Betrachtung über H. v. Kleists „Michael Kohlhaas"
Author	浦田, 智(Urata, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1983
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.45, (1983. 12) ,p.132- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00450001-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クライストの『ミヒャエル・コールハース』 についての一考察

浦 田 智

(1)

クライストの物語は、全部で八篇あるが、最も長く、また最も優れた作品として評価されているのが、『ミヒャエル・コールハース』である。伝えられるところによると、クライストは、この物語の材料となったハンス・コールハースの話⁽¹⁾を友人エルンスト・フォン・プフェルから聞いていたらしい。その後、断片が『フェーブス』六号(一八〇八年)誌上に発表されたが、その続きは、この雑誌には掲載されなかった。一八一〇年、物語集が出版される時になって初めて全体が完成されたのである。この物語の素材としては、プフェルの話だけでなく、クリストフ・シェットゲンとゲオルク・クライズイヒによって編まれた『上部シュレージエンとそれに隣接する諸国の歴史の拾遺集』の第三部にとり入れられた「ベトリ・ハフティティウスによって書かれた年代記のハンス・コールハースに関する報告」をも参照したのではないかと言われているが、⁽²⁾いずれにせよ、クライストは、ハンス・コールハースの英雄的な生涯ではなく、悲劇的

な生涯に非常な興味と共感を覚えたい。

それでは、以下においてこの物語を主題・文構造等種々の観点から考察していこうと思う。この物語は、クライストの作品に特有な、既に全体の主題を含んだ、読者を緊張させ、興味を覚えさせるような、すぐにその独特な雰囲気の世界へと誘う文章で始まる。やや長いとは思いますが、他の物語の冒頭と同様に、ここには、クライストの特性が、非常によく顕現されているので、以下に挙げておく。

„An den Ufern der Havel lebte, um die Mitte des sechzehnten Jahrhunderts, ein Rohändler, namens Michael Kohlhaas, Sohn eines Schulmeisters, einer der rechtschaffensten zugleich und entschlichsten Menschen seiner Zeit. — Dieser außerordentliche Mann würde, bis in sein dreißigstes Jahr für das Muster eines guten Staatsbürgers haben gelten können. Er besaß in einem Dorfe, das noch von ihm den Namen führt, einen Meierhof, auf welchem er sich durch sein Gewerbe ruhig ernährte; die Kinder, die ihm sein Weib schenkte, erzog er, in der Furcht Gottes, zur Arbeitsamkeit und Treue; nicht einer war unter seinen Nachbarn, der sich nicht seiner Wohltätigkeit, oder seiner Gerechtigkeit erfreut hätte; kurz, die Welt würde sein Andenken haben segnen müssen, wenn er in einer Tugend nicht ausgeschweift hätte. Das Rechtgefühl aber machte ihn zum Räuber und Mörder.“⁽³⁾

ここまでが、この物語の導入部である。一般に、導入部というのは、単に物語の始まる部分というだけでなく、連続的な出来事が起こり、筋が展開される前に、作中人物やその周囲の状況に関する必要な説明や描写を行ない、物語の発端を提示する序説的説明ないし提示の部分である。C・ブルックスとR・P・ウォーレンの『小説の理解』の定義を引け

ば、小説における序説的説明ないし提示とは、「物語の本格的な行動が開始される以前に存在するところの状態や人物についての必要な知識を読者に与える過程」⁽⁴⁾なのである。まず所・時・人を簡潔に説明し、さらに全体の鍵となる事柄も付け加える。(例えば、『クライストの物語中』『O侯爵夫人』『チリの地震』『聖ドミンゴの婚約』は、場所を示す表現で、『拾い子』『決闘』は、人物の記述で、『聖なるツェツィーリエ・別題音楽の力』は、時を示す記述で始まる。)それから徐々に力強く明確に事件を展開させ、進行するにつれて作中人物を中心人物とからませながら登場させ、筋を緊密にまとめあげて最後まで読者をぐいぐいと引っぱっていく。この冒頭には、中心人物コールハースの性格、生活の様子、隣人関係等が極めて簡潔客観的に描写されているが、彼の顔や体格などといった具体性や、あるいは心理描写は、全体を通じてどこにも見あたらない。「当時最も廉直な、しかも最も凶暴な人物のひとり」という表現には、後で起こる出来事に対する予見のようなものが、感じられる。この部分は、雑誌『フューブス』発表の断片では、*einer der auferordentlichsten und fürchterlichsten Menschen* (最も異常で最も恐るべき人物のひとり)とあり、「世人の考えも及ばぬほど恐ろしい人物」であることを表現するにはひじょうに適当な、似かよった概念を並列させた表現となっているが、「物語集」に書かれていた表現とは全く異なっている。というのは、「断片」における *auferordentlich* と *fürchterlich* という二つの形容詞は、どちらかといえば、類似概念の一方の極にある語句であるが、後にまとめられた「物語集」で用いられ、特に *zugleich* (同時に) という語まで並置されている *rechtschaffen* と *ensetzlich* という形容詞は、一方を正とすれば、他方は悪となる相異なった反対の概念を含んでいるからである。ここで問題になるのは、*zugleich* が *rechtschaffen* のすぐ後に置かれた意味である。これは、正悪の二概念、つまり両極にある二つの世界を結びつける役を担っていると解せないだろうか。類似概念の結合には、*und* だけで十分だろうか、相反する強い概念を結びつけるには、物足りなさ

を感ぜずにはいられない。そこでこの語を付加することにより、単に結びつけようとしただけでなく、両極の対比を一層明確にしようとしたのだろう。このような対極的世界像は、一語句のレベルに留まらず、物語全体を通して、文体にも表われている。ハンス・ヘルマンは、論文『偶然と自我』の中で、クライストの文体的特徴として、“…: dergestalt, daß…”を指摘し、次のようにその構造の持つ意味を解釈している。dergestaltに先行する文章を偶然の世界、daßに続く文章を自我の世界として把握し、偶然と自我の世界は、互いに関連しあつて存在していることを意味し、この偶然と自我を接続する“…: dergestalt, daß…”では、セミコロンのよつて、主文章と副文章を独立させ、一個の独自の世界を後続文中に築きあげさせる一方、副文章はあくまでdergestaltが示すように、説明の文章なのであるから、先行の主文章から離れることができない。このように二つの文成文が、即ち二つの世界が、結ばれると同時に分離させられている状況を描き出そうとしている⁽⁵⁾、というのである。ヴォルフガング・カイザーは、他方、このような対極的世界像を持つ構文を次のように分類する。過去形の述語動詞の連続する主文章が並列されている構文⁽⁶⁾をタイプⅠとし、副文章や分詞構文によつて断絶させられた構文をタイプⅡとする。タイプⅠは、筋を進める主線であり、タイプⅡは、状況を描写する副線であると規定する。さらに副文章をも、“so daß”、“dergestalt, daß”に導かれる結果文や目的語文のグループと⁽⁷⁾、“während”、“indem”、“da”等に導かれる時の副文や関係文のグループに分類する。そして前者は筋を続行させる力であり、後者は、筋を違った方向に持つていく力である。クライストの物語の世界像は、タイプⅠとタイプⅡが、結果文のグループと時の副文、関係文が相寄つて作り出す、動かす力とその結果の状態との連鎖にあると結論している⁽⁷⁾。クライストの物語は、このように構文的にも、対極的世界を持ち、今日まで、運命と感情、現実と自覚のように把握されてきたのである⁽⁸⁾。

四行目では、*der* *merkwürdige* *Mann* が *der* *außerordentliche* *Mann* と書き換えられている。初稿と改稿の形容詞のこのような相異は、クライストがいかにも細部の語句にまで注意を払い、一言一句を大事に扱ったかを示す好例であろう。続く「この並外れた男も、三十才になるまでは、善良な市民の鑑といつてよかつたろう」という接続法の用いられている部分では、何かしらある事情が彼に起こったに相違ないことを予想させるが、その理由については一言も述べられてはいない。しかし、毎日の平凡で敬虔な市民生活から、突然「彼は、己れのひとつの美点の破目を外してしまい、正義感が昂じて、人殺しの盗賊になりさがった。」誠実敬虔でもあり、凶暴な人物でもあるという両極的性格を持つがゆえに、正義感の強さが強盗殺人という悪へと彼を追いやる。『シュロップフェンシュタイン家』第三幕第二場で、ロシッツ家の奥様が、「すべてにまさっているのは正義感だけなのよ」と言う⁽⁹⁾。この考え方を自分の枠内で極端にまで押し進めていくのが、コールハースである。彼の性格を暗示するのは、冒頭のこの個所だけである。この冒頭には、物語全体の核ともなる要素が詰めこまれていて、内容的・象徴的には、「結末」と見なすことも可能だろう。『O侯爵夫人』では、このような予見は、もっと具体的な形で冒頭に述べられている。すなわち、O侯爵夫人が、新聞に「自分は身に覚えなくして身重となったものであるが、やがて生まれる子の父たるべき人は名のりではほしい。自分は、家庭の体面上それなる人と結婚する決心である」というまったく奇妙な広告を出したところから始まる。事件がこのように先取りして示されることによって、読者は、直ちに物語のかもしれない独特の雰囲気の中へ、あるいは、緊迫した事件の渦中へと引き込まれる。読者は、この広告がどうして出されたのだろうかという疑問を持ち、その結果、この物語の世界に自然と入っていきまう。そして、映画の回想シーンのように、時間がこの新聞広告から逆戻りし、夫人の環境や種々の事件が、あたかも新聞の報道のように乾いた調子で語られていく。

コールハースは、到って平凡で信心深い善良な博労であったが、ただ持ち前の正義感だけが異常に強く、おそらくこの事件も、もし彼が、それほど強い正義感を持たない、小心な男だったら起こらなかつただろう。ある時、彼は、商用でザクセン領のトロнка城を通過しようとした時、二頭の黒馬を通行証の担保として無理矢理預けさせられるが、後日再び城を訪れると、農耕に使われて見る影もないやせ馬になっていた。そこで彼は、腹にすえかねて文句を言うが、逆に城から追い出される。しかし、「持ち前の正義感が精巧な秤のようにまだ揺れ動いて」⁽¹⁰⁾相手に非があるとは決めかねていた。読者にとってトロнка城の若殿ヴェンツェルの非道は明らかであるが、コールハースはまだ正邪の判断を下せないでいる。馬の番をさせた下僕からヴェンツェル側の非道な仕打ちをつぶさに聞き、「人並優れた正義感」から、この不法を許すまじと決意し、法廷に訴えることを「貞淑な」妻リースベトに打ちあける。しかし、彼が訴えても、すべてヴェンツェル側によってもみ消されてしまう。しかも、そればかりでなく、彼は、「無用なる訴訟狂」扱いされ、人間としての品位まで傷つけられることになった。こうして彼の訴訟も取りあげられず、今もって、トロнка城に残して来た馬が畑仕事に使われているのを聞くに及んで、彼の正義感の限界を越え、一時に燃えあがる。彼は、全てをなげうってあくまでも正義の敵と戦い、世のために滅ぼそうと決心する。こうなつては、妻リースベトの忠告も、子供の情愛も、彼の義憤を抑えるには十分でない。強い正義感に裏づけされた彼のこの義憤は高まり、ついには、「神だけに恭順であつて帝国からも世界からも自由なる者」「このたびの訴訟事件で若殿ヴェンツェルの味方をするすべての者への見せしめとして、全世界をとらえている邪悪を、火と剣をもって処罰するために天降つてきた、首天使ミヒャエルの代理

人」と自ら称し、悪をこらす聖戦の指揮者であると豪語するに至る。妻リースベトは、彼を押しとどめる最後の手段として、自ら嘆願書を提出しようとするが、領主の近従達に槍で胸をつかれ、死んでしまう。「彼の正しさを擁護すべき王侯や貴族が、逆に敵側に味方しているのに対し、最も誠実で法の厳正な適用を何人よりもまして要求する彼自身が、正義の戦いとはいえ、法に逆らった力を用い、法を犯し、復讐の鬼となる矛盾、逆説が生じる。この逆説の中で彼が自らの邪剣を正当化するところに彼の悲劇がある。」⁽¹¹⁾ 妻の死は、逆に復讐する決心を固めさせてしまう。彼は、世の人々がそうであるように正義―即ち、この世の法―の力に強い信頼を寄せていた。それ故初めは、双方の言い分を聞いてから判断しようとする。自己の権利を侵害されても、すぐには納得できないでいる。しかし、自己の権利をとり戻す試みが、相手側の策謀により失敗した時、自分の感情に納得のいくような倫理を形成してしまい、社会の倫理と食い違いがあっても一向にかまわない。そして自らの倫理感に従って、社会を恐怖につきおとす行動に出る。「無意識のうちに彼は、その生みの親、善意に基いて、危険きわまりないものを作り出し、意志に基づく過激な信念が因をなして、ふむべき道本来の目標をのりこえて先走る、原作者の象徴となっている。」⁽¹²⁾ 最初の紛争の原因は、二頭の黒馬にある。初めは、このように明瞭にしてわかりやすい小さな事件が原因なのであるが、次には、新しい場所や人物が加わってくることに、ますます複雑になり、対象も黒馬から人間の権利という大きなものへと拡大していく。こうして彼の正義の戦いが始められる。「フェーブス」誌上の断片は、ここで終わっている。コールハースは、まだ比較的穏やかな行動しかとっていない。まだ彼の正義感は、現実世界の仮象に惑わされているので、思い切った行動に出るのをさえぎられている。しかし、彼の戸惑いは、文には示されず、彼の行動を通して暗示されている。

ついに彼は、徒党を率いてトロンカ城に乱入し、火を放つが、目指す敵には逃げられてしまう。「あらゆるキリスト

者の共通の敵であるヴェンツェル」を追跡する間に、徒党の数も増え、次々に町に火を放つ。ここで物語をさらに展開させるために、やや強引とも思えるやり方で、神の下僕たるルターを登場させる。ルターは復讐の血にうえた凶暴なコールハースに対し、その良心を喚起しようと試みる。それまで正義を旗印として戦っているという認識から起こって、彼の激しい闘争心も、ルターの言葉少ない告示文一枚で簡単に打ち砕かれてしまう。ルターは、コールハースにとつて最も尊敬する、この世における聖なるものの代表者だからである。彼の受けた衝撃は、言葉では発せられず、無言のうち身振りで示される。「たちまち顔が真赤になった。コールハースは、かぶとを脱いで初めから終わりまで、二度読み返した。それから落ち着かない眼差しで、下僕達の方をふり向いた。何か言いたそうだったが、しかし何も言わずに、貼り紙を柱からはぎとって、もう一度読み返した。」このような状態に陥るとクライスト劇の主人公ならば、雄弁に語るところだが、この小説ではコールハースの心の状態が、ひとことも述べられていない。一般にクライストが、物語中で心理的な説明を付加するのは、非常に希有なことである。⁽¹³⁾ルターは、コールハースとの会見の結果、この異常な敬虔深らしい人物が、彼の信ずる救世主によっては救われないことを知るが、一部始終を聞いて同情し、ザクセン侯への取りなしだけは約束する。これに対し、コールハースは、ルターとの会見で、民衆をも巻きこんだ戦いが非道の行為であることを認め、帰りに、聖餐のお恵みを垂れてくれるように頼むが、主イエスも敵をすべて許したわけではないと主張したので、ルターは主イエスへの執りなしを、断わる。「ルターの登場する場面は、宗教的な精神の問題の克服と考えられてはいない。……問題の宗教的な解決は、コールハースクライストにとつて、解決ではなく、逃げ口である。」⁽¹⁴⁾ザクセン侯は、ルターへの忠言を受け入れて、コールハースを一度は特赦したものの、再びヴェンツェル派の策略が効を奏し、侯は約束を破りコールハースはなれば監禁の状態に置かれる。この時、以前の仲間ナーゲルシュミッ

トから手紙が届き、これが決定的要因となり、有罪の判決が下される。「侯国内の良民の權益を保護すべき立場にある侯自らが、一部の者に惑わされて、特赦を無造作に破棄するとは領主の威厳を失い、その義務に反したことになる。したがって、ザクセン侯には、もはや彼を裁く権限のないどころか、侯自身、法の濫用の罪により、神の裁きを受けるべき立場に墮ちている。」⁽¹⁶⁾ ルター登場以前、即ちザクセン侯の特赦取り消しまでは、コールハースの復讐の対象は、トロンカ城の若殿であったが、今やザクセン侯もそれに含まれることになった。こうして事件は、ますます拡大していく。

ルターの仲介は、一時事件を解決するかに見えたが、結果的には、ザクセン侯のコールハースに対する不当な措置で終わった。しかし、この後すぐに、クライストは、ブランデンブルク侯を登場させる。さらに、「どういう理由からか」と断り書きをして、ポーランドとブランデンブルク侯が、ザクセン王家と事をかまえた事態とコールハースの事件を結びつけてしまう。クライストは、原典から、ザクセンとブランデンブルク両国間の緊迫した状態を参照している。史実によれば、当時のザクセン侯は、質実剛健な君主であり、ブランデンブルク侯は、軟弱な享樂的な人物であった。ザクセン侯の性格は、物語中に次のような表現で明らかにされている。宮廷で、コールハースの事件が問題になったときの、「目に逡巡の色を浮かべながら」「きわめて友情に厚い心根の持ち主であった」、また、ナーゲルシュミットがコールハースに手紙を出した時の「この手紙だけを根拠にして、その約束を破るようなことはできない」と強硬に拒否した態度から、うかがわれるように、一見肯定的に扱われているようにみえる。しかし、結果的には、ヴェンツェル派の策謀に欺かれ、コールハースの特赦を取り消すなど、非難の目が向けられる存在に、否それどころか復讐の対象になってしまっている。他方、ブランデンブルク侯の性格に関する表現は皆無ではあるが、その公明正大でありつばな君主であ

ることが彼の具体的な行為で表わされている。例えば、物語の最後で、コールハースの子供達を王立の学校で教育させるよう宰相に言いわたすこと等々。このように、この物語の両侯の性格は、史実とまったく逆になっている。クライストは、なぜこの両侯の性格を逆にしたのだろうか。この問いに対する議論は、あまりなされてはいないが、これは、当時の国際関係から推測できる。クライストは、ナポレオンのプロイセン占領に対し、愛国の念に燃える一方、ザクセン侯がナポレオンと同盟し、プロイセンを見殺しにしたことに対して、憤りを感じていた時期だったのである。そこで、両侯の性格を入れかえることで、この憤りの吐け口を求めたのだろうかと言われている。後半部におけるもう一つのエピソード、ジブシー女の登場と古い札は、幻想的で神秘的な雰囲気はこの物語に付け加えている。このエピソードは、題材的に、ロマン主義者好みのものだが、その描写は、その種の筆法からは遠く離れている。コールハースによって、一つの実事が語られる。場面の転換が行なわれ、時が逆戻りする。かつてコールハースは、ザクセン侯国の運命に関する古い札を、あるジブシーの女子言者から渡される。ザクセン侯はそれを何とかして手に入れようと、様々な策を弄するが、コールハースは手離そうとしない。そこで、最後の手段として、ジブシー女に似た女をコールハースに近づけ、古い札をまぎあげようとするが、実は、彼女は、当の札を渡した本人で、彼に用心するよう警告して立ち去る。「真実はかならずしも真実らしく見えないもので、この場合もまた、われわれは実際の事実を伝えるだけで、これを疑うことは、疑うことの好きな人の自由にまかせたい。」コールハースは、ベルリンで最終的に死刑の判決を下されるが、処刑される前に例の古い札を飲みこんだので、ザクセン侯はそれを見て失神する。この物語では、このジブシー女の挿話は、ルターのそれと対置されている。特に、ジブシー女がコールハースの刑の直前に送った手紙の署名“Deine Elisabeth”は象徴的に理解されうるが、ジブシー女の神秘さを一層強めている。「その人物の神秘さは解き明かされていない。物語の

経過にとって重要ではない。重要なのは、彼女が表わす象徴である。彼女は、自分自身の分身であり、同時にリースベトの手紙を書く。彼女は、神の全知の制御中枢であり、全能の神の神秘を解く鍵を所有している。⁽¹⁶⁾しかし、このジブシー女の存在が何を象徴しているかは、この手紙の場面以前に既に暗示されていた。牢屋のコールハースを訪れたジブシー女は去る時に、コールハースに向かって、「さよなら (Auf Wiedersehen) … こんど会った時には一切話してあげるよ」と言うのであった。ジブシー女が亡き妻とオーバーラップして、死の世界での再会を予言するかのようである。

コールハースの死も決して敗北の死ではない、占い札を渡せば生命の保証はされるかもしれないのに、死の直前飲み込んでしまふ、これは、自己の感情の絶対性を信じた勝利の死である。彼の死の明るさは、また同時に、国家によって守られるべき個人の権利が満たされたことによる、現実の法に対する信頼の回復から生じている。同じように満足した死でも、『拾い子』のピアキの場合とは異なっている。誠実な感情を持つピアキは、自分は地獄に墮ちようとも、復讐を果たそうとする。要するに、自己の感情を信頼するピアキが現実世界に対しては信を置いていないのと対照的に、コールハースは現実の秩序に対する信頼を回復する。

(3)

クライストの物語は、重点を人物ではなく、事件そのものに置き、人物の性格を異常な事件の報告されるうちに次第に浮かびあがらせていく。この物語の冒頭で、これから起こる事件が予告的に語られ、主人公の性格が、最も簡潔に報告調といえる調子で描かれているのは、既に見たとおりである。物語全体も、あたかも新聞記事のように乾いた文体

によって緊張感を持続させながら、出来事が作中人物の行動を通して報告される。この点に関しては、種々の議論がされているが、フリードリヒ・グンドルフの『H・V・クライスト』⁽¹⁷⁾に的確に簡潔に述べられているので、拙論と関係を有する部分を一瞥しておこうと思う。グンドルフによれば、物語文学は、二つの基本的欲求、報告及び描写の欲求から生じているものであり、前者は、事件を問題とし、後者は、空間性を問題とする。この二つの衝動が分離されていることは稀で、密接に関連しあっている。一般に叙事文学は、読者のうけとり方によって、あるいは、作者のテーマの扱い方によって、短編とか長編とかメルヒェンのように区別される如く、どの物語作者も、彼本来の衝動が向けられる対象を持つている。クライストの物語ろうとする衝動は、画家が絵を描くように描写することではなく、外界の事象を時間の経過と共に描写することに向けられる。「夜が明けた頃」「昼頃」といった時を表わす語句が、多いことは、その好例といえるだろう。物語の内容は、出来事そのものであり、意志の表出を現存の事件として空間的に描写するのではなく、経過する事件を時間的に報告する。理由をジャンルの相違に見い出すことも可能であるが、クライストは、戯曲では作中人物の科白及び動作により、性格を内面から描写し、事件を展開させていくが、物語では、もっぱら事件を外側から距離をおいて傍観し、事件を通して作中人物を描き出していく。「物語り手としてのクライストは完全に事実である事件の魔力の中にいる。フィールディングやヴィーラントのように、人物を自由にあやつっているわけではない。」⁽¹⁸⁾クライスト劇では、内から外へ、つまり作者の努力は、作中人物の身ぶりで表わされる言語表現に向けられる。他方、物語では、逆に外から内へ、つまり作中人物の行動と苦悩に関する報告に向けられる。事件が人間を動かす。一般に、劇の人物を創作するには、単に外からの観察だけでは十分ではない。言語とか、心の動きを直接反映する要素をすべて具えていなければならない。しかし、異常な事件を報告するには、行動している人物に、作者自身の内面が直接反映され

ている必要はない。物語作者は、各個人の常的生活には関心を示さず、現実世界のあるがままの姿をとらえ、生き生きとした表現にするために、工夫をするだけである。

クライストの物語は、「非常に力をこめて物語られた異常な特殊事件の報告」である。そこでは、緊張とその解放が問題であり、常に表現力の限界にまで突き進む劇作家の特徴を見出すことができる。クライスト劇は、内部から外部へ、本質から振舞いや行為へ、人間から筋へと関心の対象が移るが、物語では、まさにその逆で、外部から内部へ突き進む。人間ではなく、事件がまず存在し、人物は、事件によって徐々にその存在が、はっきりしてくる。作者の内面の激しさは、対話ではなく、語られている報告の調子の良さと重さの中に現われている。クライストの劇では、比較的に取るに足らない、あるいは素朴な事件が特定人物の報告を通して、盛り上げられ、高められるのに、物語では、比較的素朴な、あるいは単純な人物が、事件の異常な力強さを通して重々しく偉大に、巨大になるのである。素朴で正義感の強いコールハースが、事件の経過と共に、恐ろしい人間から盗賊の首領へと巨大になっていく様子は、まさにグンドルフの説に一致する。コールハースは、このような意味で、クライストの物語の中の代表的な人物のひとりである。

さて、この物語を内容に添って種々のモチーフ等を一瞥してきたが、最後に彼の物語を構成している文そのものについて今一度触れておきたい。なぜなら、そこにも、クライストの世界像が顕現しているからである。筋をすべてしっかりと把握している作者の意識と高い精神性が、文章全体を支配しているので、読者に先を読ませる意欲を起させるだけの力を持つのである。既にクライストの文体の特徴として挙げた *degestalt. das* も、読者の関心をひきよせるに十分な事件の連続性を示す一要素となっている。またクライストが官庁や法律の用語や文体を使っていることは、動詞が三つ並列に置かれているのを見ても明らかである。⁽¹⁹⁾ 句読法、接続詞の使用及び動詞の並置は、彼がいかに、物語の報告性

を強め、自然に文章に緊張感を持たせ、読者を自己の世界にひきこみ、先へ先へと連れていこうとしたかの表われとみなすことができるだろう。

ゲーテが「生起した前代未聞の出来事」と言い表わしたノヴェレは、一つの主題を中心にして、すべてがその中心を志向しながら、急速に展開し、完結するものである。その際一言一句の効果の適切さ、取り扱われるテーマの鮮明さ、全体を統べる厳密さ、ならびに伏線の自然性が要求される。そして、その要求がすべて満たされた緊張した構成の作品では、必ずどこかに作中人物の口を借りた作者の心情の吐露や社会等に対する批評が中途に語られて、作品を豊かにするような箇所がある。しかし、クライストの小説には、このような箇所がまったく欠けている。End.その他の接続詞や句読点によって次から次へと筋が運ばれ、最初から最後まで緊張の連続である。読者をして先へと駆りたてる所似である。クライストは、「短編小説執筆にあたって、自己を排除し、己れの情熱的態度を抑圧する。というよりもむしろ、その態度を、べつの軌道にのせるのである。……彼は、この自我の排除を一方的な極端にまで、極端な客観性にまで……押しつめていく。」⁽²⁰⁾客観的で、機智があり、創造的情熱にかられて、ある集中へと高まり、緊張が終始ゆるまないような筋の運びは、実に見事に彼の物語に表われている。「クライストの物語は、素材が非常に種々様々である。……しかし、共通性を持っているという印象が、どうしてもわき出て来る。……みな本来のジャンルの特性を失い、クライスト的な物語になっている。」⁽²¹⁾

註

(一) Erläuterungen und Dokumente; Heinrich von Kleist, Michael Kohlhaas, Stuttgart 1981, S. 73 f. *だ* 小説

の地名が、クライストのヴェルツブルクへの旅の道筋に一致することから、原案は既に一八〇一年成立していたのではないかと推測される。

- (2) Erläuterungen und Dokumente; Heinrich von Kleist, Michael Kohlhaas, Stuttgart 1981, S. 57 f.
- (3) Heinrich von Kleist: Werke, dtv-Gesamtausgabe, B. 4, S. 5.
- (4) Cleanth Brooks Jr. and Robert Pen Warren: Understanding Fiction (Appleton-Century-Crofts, Inc.) p. 604.
- (5) Hans Peter Herrmann: Zufall und Ich. In: H. v. Kleist, Aufsätze und Essays, hrsg. von W. Müller-Seidel, Darmstadt 1973, S. 374 f.
- (6) 原書「……ins Gesicht trat, stieg vom Pferde, und sagte: “(dtv-Gesamtausgabe B. 4, S. 11)
- (7) Wolfgang Kayser: Kleist als Erzähler. In: H. v. Kleist, Aufsätze und Essays, hrsg. von W. Müller-Seidel, Darmstadt 1973, S. 238 f.
- (8) 上の有名な世界観をK. v. K. =「ザルグマツトは」, Kohlhaas [...] fragte, [...]? Und da [...] so [...]“から説明しようとする。
- (9) “Denn über alles siegt das Rechtgefühl.“ (dtv-Gesamtausgabe B. 1, S. 123)
- (10) クライストの好んだ比喩。ヴァンヘルツリーネ・ファン・シヤンマ宛ての手紙(一八〇〇年初頭)や『マンフートリオン』にも類似の表現が見られる。
- (11) 福迫佑治、『クライスト、その生涯と作品』一九七八年、三修社、四三三頁
- (12) 『デーモンとの闘争』一九七三年、みすず書房、小宮曠三訳、二六五頁以下
- (13) Curt Hohoff: H. v. Kleist, Hamburg 1973, S. 114 f.
- (14) Hohoff: a. a. O. S. 107 f.
- (15) 福迫佑治、四三三頁
- (16) Hohoff: a. a. O. S. 111.
- (17) Friedrich Gundolf: Heinrich von Kleist, Berlin 1922, S. 152 f.
- (18) Wolfgang Kayser: Kleist als Erzähler. In: H. v. Kleist, Aufsätze und Essays, hrsg. von W. Müller-Seidel, Darmstadt 1973, S. 237 f.

- (21) Wilhelm Schneider : Stilistische deutsche Grammatik. Freiburg 1960, S. 319 f. u. S. 468.
- (22) 『トーマンノ語学』 11次 1頁25行
- (23) Friedrich Koch : H. v. Kleist, Bewußtsein und Wirklichkeit. Stuttgart 1958, S. 7.